

# DMATがLINE活用

## 熊本地震隊員ら最大71人参加

熊本地震で県内から被災地に派遣されたDMAT(災害派遣医療チーム)が隊員同士や県庁との情報交換・連絡の手段として、無料通信アプリ「LINE(ライン)」を初めて組織的に活用した。多人数が同時にメッセージをやり取りできる「グループ」機能を使い、通行可能な道路や宿泊できる施設、現地の医療状況などの情報を交わし、活動に反映させた。隊員らは「公的な災害用システムでは扱わない、細かな情報を共有できた」と手応えを語る。

【久木田照子】

## 情報共有 活動に反映

県や参加医療チームによると、DMATによる都道府県単位でのLINEの活用は全国的に見ても先行事例とみられる。今回は情報管理に配慮した上での試用で、重要な連絡には電話を使ったが、県内のDMAT関係者は検証を重ね、同様の使い方ができる公的な専用システムの開発を提案したい考えだ。

**DMAT**  
災害発生からおおむね48時間以内に被災地に入り、治療や病院支援などを行う医療チームで、医師や看護師、業務調整員(事務職員など)で構成する。熊本地震では県内から10医療機関の計13チームが4月16日以降、順

熊本地震で2回目の最大震度7を観測した遣された際、宿泊場所や原発事故に関する情報不足を経験した。熊本地震ではインターネットが使用可能だったため、各隊と後方支援役がいる県庁などとの間で正確な情報を共有したいとLINEの試用を思いついた。

「岡山で活動した隊員は「岡山で支援調整をして」といった気遣いのメッセージも送られ、

DMATや県の担当者らは「大勢で細かい部分まで情報を共有すると、活動の有効性が高まると実感した。公的システムで同様の取り組みができるよう、岡山から全国に発信したい」と話している。

4月16日未明の地震を受け、現地にDMATとして派遣が決まった岡山済生会総合病院の稲葉基高医師が同日朝、LINEのグループを作り、別の医療機関チームに所属する業務調整員らを「招待」したのが発端。最大で隊員ら関係する71人がグループに参加した。

稲葉医師らは東日本大震災時に岩手県に派遣された。現地でのミ

## 「システム全国へ発信を」

被災地での活動中、スマートフォンで情報を確認する稲葉基高医師(中央)＝県提供



り組みができるよう、岡山から全国に発信したい」と話している。